

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370494

研究課題名(和文) アルタイ諸語の「華夷訳語」のコーパス構築と漢字音訳方式の研究

研究課題名(英文) Construction of the Corpus for Hua-Yi-Yi-Yu in Altaic Languages and Study on the Transcription with Chinese Characters

研究代表者

孟 達来 (MENG, Dalai)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・研究員

研究者番号：40609913

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：各種「華夷訳語」の中から、モンゴル語、ウイグル語、女真語が扱われた「華夷訳語」を取り上げ、各々の言語のローマ字転写と音訳漢字の対応関係を反映したパラレルコーパスを構築した。また、各言語の「華夷訳語」毎に、音訳漢字と表記された音との対応関係を明らかにし、かつ音訳漢字の出現位置を示した上、該当音訳漢字が用いられた全ての用例を抽出し、データベースを作成した。また、一部の「華夷訳語」の音訳漢字の使い分けの分析を実施した。なお、各種「華夷訳語」のうち、ウイグル語が扱われた「畏兀兒館訳語」の漢字音訳方式についての研究成果を本としてまとめ上げた。

研究成果の概要(英文)：In this study, a Parallel Corpus was constructed by investigating Hua-Yi-Yi-Yu used in the transcription of Mongolian, Uyghur and Jurchen languages. The Parallel Corpus collects Hua-Yi-Yi-Yu and reflects the corresponding relations between those languages and the Chinese characters used for their transcriptions. Based on the Corpus, Chinese characters in Hua-Yi-Yi-Yu, the sounds they represent, the frequency of their appearances and the position of each character used in the transcription of a word were analyzed and identified. Furthermore, for each Chinese character, all the words for which it appeared in their transcriptions were painstakingly picked and collected into a database, and the rationales for the usage of certain Chinese characters in certain transcriptions were examined. In addition, a study was also conducted on the Chinese transcription of the Chinese-Uyghur Vocabulary Wei-Wu-Er-Guan Yi-Yu. The entire study results are summarized in a book.

研究分野：人文学

キーワード：アルタイ諸語 華夷訳語 コーパス 漢字音訳

1. 研究開始当初の背景

「華夷訳語」とは、中国の明朝時代に各国語の学習書として作られた、漢語(中国語)とその周辺諸言語との対音・対訳からなる文献である。

「華夷訳語」には「甲」「乙」「丙」の三種があり、そのうち、アルタイ諸語に関わるのは、モンゴル語が扱われている甲種「華夷訳語」、乙種「韃靼訳語」、丙種「韃靼訳語」があり、ウイグル語が扱われている乙種「高昌館訳語」、丙種「畏兀児館訳語」があり、女真語が扱われている乙種「女真訳語」、丙種「女直訳語」がある。言語学的観点から見ても、これらの「華夷訳語」は、音訳当時のモンゴル語、ウイグル語、女真語などアルタイ諸語および漢語の研究にとって極めて重要な資料となるだけでなく、漢字音訳(表記)方式の研究にとっても貴重な資料と考えられる。

アルタイ諸語の「華夷訳語」に関する従来の研究において、主に個々の訳語の音訳漢字と、音訳された言語の音韻についての研究が行われてきた(山崎忠 1951&1952、庄垣内正弘 1983、愛新覚羅 烏拉熙春 2009)。また、漢字声調の音訳へ関与の問題も扱われてきた(更科慎一 2000、孟達来 2007)。一方、個別の訳語に関しては、漢字の「意味」の音訳への関与についても検討されてきた(栗林均 2007)。

本研究では、諸「華夷訳語」のうち、モンゴル語が扱われた3種、ウイグル語が扱われた2種、女真語が扱われた2種といったアルタイ諸語の全ての「華夷訳語」を取り上げ、先行研究を踏まえながら、音訳漢字とローマ字転写の対応関係を反映したパラレルコーパスを構築する。次に、構築したコーパスに基づき、これら「華夷訳語」一つ一つの音訳漢字の使用状況を明らかにする。また、これら「華夷訳語」の漢字音訳によって成り立つ全ての対音データを網羅的に抽出し、データベースを作成する。最終的には、音訳漢字と対音のデータに基づき、漢字音訳方式の全体像の解明を試みる。

2. 研究の目的

本研究では、アルタイ諸語の「華夷訳語」における漢字音訳方式の全体像の解明を目的とするが、具体的には、以下の3つの点を明らかにしていく。

(1) 各種「華夷訳語」の漢字音訳方式の分析に必要な精密データを得るために、音訳漢字と各言語間の「音の対応」と「文節の対応」を含めたパラレルコーパスを構築する。

(2) 各種「華夷訳語」の漢字音訳における音表記の規則を明らかにする。漢語伝統音韻学においては、漢字一字の音が「声母・韻母/声調」に分けられるため、音訳規則を探る際に、まず、「声母」と「韻母」の音表記上の動きに着目し、その規則性を明らかにす

る。また、音訳において、漢字の声調がどのような動きをしているかについて検証し、漢字声調の音訳への関与について考察する。

(3) アルタイ諸語の各種「華夷訳語」の音訳において、漢字の「字義」「意符」を含めた「意味」の要素がどのように関与されているかについて考察する。

3. 研究の方法

(1) パラレルコーパス構築とデータ抽出

アルタイ諸語の「華夷訳語」の音訳方式を全面的に考察する際には、「音レベルでの対応関係を含むデータ」と「文節レベルでの対応関係を含むデータ」が必要となる。これらの精密データを得るには、音訳漢字と音訳された語との対応関係を含めたパラレルテキストコーパスが必要となる。そこで、本研究は、まずコーパス構築からスタートする。コーパス構築とデータ抽出の手順は、次の通りである。各種「華夷訳語」の諸版本の中から本研究が基づく版本を選定し、校正を行う。

先行研究を踏まえながら、各種「華夷訳語」のローマ字転写テキストを作成する。また、音訳漢字を整理したうえで、漢字一つ一つが対応する音を確定し、ローマ字テキストと漢字リストにタグを付ける。プログラムを実行し、パラレルコーパスを再現する。同時に、プログラム実行で、音訳の検討に必要なデータを体系的に抽出する。

(2) データ分析と音訳方式への検討

抽出したデータを比較分析し、音訳において成り立つ全ての対応関係を整理・分類する。音訳漢字一つ一つを音表記の相互関係の中で用例を用いて分析し、音訳漢字の使い分けを明らかにする。最終的には、各種「華夷訳語」の漢字音訳方式の全体像を解明する。

4. 研究成果

アルタイ諸語の各種「華夷訳語」の音訳漢字の使用状況、表記された音の種類、音訳における各言語語音と音訳漢字との対応関係を明らかにし、漢字一つ一つの「語頭・語中・語末」における出現位置や頻度、全用例など音訳漢字の使用状況を反映した計18174項目のデータを作成した。また、作成したデータに基づき、一部「華夷訳語」の音訳漢字の使い分けについて分析し、漢字音訳方式の考察を行った。

本研究で扱っている7種の「華夷訳語」のデータ分析に関して、今後、各言語のローマ字転写の調整等により、データ分析の数字は若干調整される可能性はあるが、まず、これまでのデータ分析の結果を示せば、次の通りである。

(1) 『華夷訳語』(甲種本・語彙部分)に収録された844語(文節)の音訳において、全286種類の漢字によって441種類のモンゴル語音が表記され、計578種類の「モンゴル語音:漢字」の対応関係が形成されているこ

とを明らかにした。また、全ての音訳漢字の使用状況を反映した 2158 項のデータを作成した。なお、同じモンゴル語音の表記に 1 種の漢字（末子音表記に伴う複合漢字を含める。以下同じ。）を用いる以外に、2 種以上の漢字を用いるケースが認められ、最大で 5 種の漢字が用いられることも認められた。表記された全 441 種類のモンゴル語音の表記において、1 種の漢字を用いたのが 344 項、2 種の漢字を用いたのが 64 項、3 種の漢字を用いたのが 25 項、4 種の漢字を用いたのは 7 項、5 種の漢字を用いたのは 1 項であった。

(2)「韃靼訳語」(乙種本)に収録された 845 語の音訳において、全 287 種類の漢字によって 439 種類のモンゴル語音が表記され、それが全 563 種類の「モンゴル語音：漢字」の対応関係を形成していることが判明した。また、全音訳漢字の使用状況を反映した 2156 項のデータを作成した。なお、全 439 種類のモンゴル語音の表記において、1 種の漢字を用いたのが 346 項、2 種の漢字を用いたのが 65 項、3 種の漢字を用いたのが 23 項、4 種の漢字を用いたのが 5 項であった。

(3)「韃靼訳語」(丙種本)に収録された 959 語の音訳において、全 270 種類の漢字によって 467 種類のモンゴル語音が表記され、624 種類の「モンゴル語音：漢字」の対応関係が形成されていることを明らかにした。また、全音訳漢字の使用状況を反映した 2609 項のデータを作成した。そして、全 470 種類のモンゴル語音の表記において、1 種の漢字を用いたのが 354 項、2 種の漢字を用いたのが 90 項、3 種の漢字を用いたのが 19 項、4 種の漢字を用いたのが 4 項、5 種の漢字を用いたのが 2 項、6 種の漢字を用いたのが 1 項であった。

(4)「高昌館雑字」(乙種本)に収録された 1002 語の音訳において、277 種類の漢字によって 674 種類のウイグル語音が表記され、全 852 種類の「ウイグル語音：漢字」の対応関係が形成されていることが明らかにした。また、全ての音訳漢字の使用状況を反映した 2590 項のデータを作成した。全 674 種類のウイグル語音の表記において、1 種の漢字を用いたのが 539 項、2 種の漢字を用いたのが 105 項、3 種の漢字を用いたのが 25 項、4 種の漢字を用いたのが 3 項であり、5 種の漢字を用いたケースは見受けられず、6 種の漢字を用いたのが 2 項であった。

(5)「畏兀児館訳語」(丙種本)に収録された 917 語の音訳において、315 種類の漢字によって 529 種類のウイグル語音が表記され、全 681 種類「ウイグル語音：漢字」の対応関係が形成されていることを明らかにした。また、全音訳漢字の使用状況を反映した 2069 項のデータを作成した。なお、全 529 種類のウイグル語音の表記において、1 種の漢字を用いたのが 405 項、2 種の漢字を用いたのが 103 項、3 種の漢字を用いたのが 15 項、4 種の漢字を用いたのが 5 項、5 種の漢字を用い

たのが 1 項であった。

(6)「女真訳語」(乙種本)に収録された 917 語の音訳において、全 340 種類の漢字によって 380 種類の女真語音が表記され、565 種類の「女真語音：漢字」の対応関係が形成されていることを明らかにした。また、全音訳漢字の使用状況を反映した 2492 項のデータを作成した。全 380 種類の女真語音の表記において、1 種の漢字を用いたのが 261 項、2 種の漢字を用いたのが 80 項、3 種の漢字を用いたのが 33 項、4 種の漢字を用いたのが 3 項、5 種の漢字を用いたのが 2 項であり、6 種の漢字を用いたケースは見受けられず、7 種の漢字を用いたのが 1 項であった。

(7)「女直訳語」(丙種本)に収録された 1154 語の音訳において、全 308 種類の漢字によって 302 種類の女真語音が表記され、それが全 406 種類の「女真語音：漢字」の対応関係を形成していることが判明した。また、全音訳漢字の使用状況を反映した 4100 項のデータを作成した。漢字使いに関しては、同じ音の表記において、1 種の漢字を用いたのが 230 項、2 種の漢字を用いたのが 50 項、3 種の漢字を用いたのが 15 項、4 種の漢字を用いたのが 4 項、5 種の漢字を用いたのが 3 項であった。

なお、これらの「華夷訳語」のうち、ウイグル語が扱われた「畏兀児館訳語」(丙種本)の研究成果は『「畏兀児館訳語」の漢字音や方式の研究』というタイトルで、「第 1 部 漢字音訳方式の考察」「第 2 部 音訳漢字による対音と分布」「第 3 部 語彙索引」という内容の著書として刊行される。

今までの研究において、アルタイ諸語が扱われた 7 種の「華夷訳語」のコーパス構築を完成し、データの抽出と分析作業も既に終わっているが、扱っている各種「華夷訳語」の音訳漢字の使い分けの分析、漢字の「音以外要素」の音訳への関与についての検討、漢字声調の音訳への関与についての考察はまた進行中であり、今後引き続き、これらの諸作業を推進していくつもりである。そして、「畏兀児館訳語」以外の「華夷訳語」に関しても、各々の研究成果を逐次に著書として取りまとめていくつもりである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

孟達来,『元朝秘史』のモンゴル語漢字音訳における音以外要素の関与について—モンゴル語音 ba の表記を事例として—,『総合政策論叢』(島根県立大学総合政策学会)第 26 号,2013 年 8 月,pp.1-12,査読有。

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計1件)

孟達来, 『畏兀児館訳語』漢字音訳方式研究, 内蒙古人民出版社(中国・内モンゴル自治区), 2016年(発行確定), 総239頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

孟達来, 研究活動紹介, NEAR News, 第46号 pp.12-13, 島根県立大学北東アジア地域研究センター, 2014年12月。

(<http://hamada.u-shimane.ac.jp/research/organization/near/42news/index.data/NEARNews46.pdf>)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

孟 達来 (Möngkedalai)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・研究員

研究者番号: 40609913

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし